

「山上の垂訓」 ～黄金律を用いていますか？～

マタイ 5：3-16

黄金比ということばを知っていますか？黄金比とは1：1.618の比率のことで、世の中にある多くのものや自然界（絵画、芸術作品、建物、教会の十字架、らせん状のもの（ひまわりの種、松ぼっくりなど）昆虫の体、宇宙の惑星など）がこの比率で成り立っています。この法則にのっとって出来ているものに、木の枝があり、木の枝は1本が2本に、そこから3本、5本、8本と広がっていきます。こういう広がり方をしないと、葉が重なり、それぞれの葉が十分に日光を受けられないからです。すべてが重なり合っただけだと阻害しあうことがないようにしているのです。法則を作る理由はそれぞれの秩序にしたがってそれぞれを阻害せず、正しい行動をするためなのです。それぞれがそれぞれの秩序にしたがって進むべき道に進むことで正しい判断ができ、且つ、その人の影響でよいものが残されるのです。世の中はこのように法則でできていて私たちの見方もその法則にしたがってやっているものを「美しくみる」という習慣があるのです。では私たちの生き方はどうでしょうか。自分が生きてきた生き方が、その正しいと思うことにのっとってできているのでしょうか。人を見たときに「ああいうことってすばらしい」「いい人だな」という法則があるのです。（マタイ5：3-16）（マタイ7：7-14）ここには人を赦すこと、祈りについて、神の義を第一に求めること、裁かないことなど、たくさんのが書かれています。これが「道徳」「秩序」「理性」と言われている法則です。これを私たちは頭ではよく理解していますが、それを自分の物にしてなかなか行うことができません。「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。これがたいせつな第一の戒めです。』あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」（マタイ22：37-40）神の国とその義を第一に求めるとはこのことであり、山上の垂訓でイエス様が語った律法はすべて「神を愛すること」「隣人を自分のように愛すること」この2つのことばにかかっているのです。あなたは自分を愛していますか。私たちは自分を愛しているとはなかなか言えません。自分の悪いところをよく理解しているからです。しかし人をさばることはいけなく、自分もさばることはできません。（マタイ7：1）自分をさばく人は、必ず人をさばくのです。人を見て自分を見るからです。自分の問題点を見ると、すぐに人の問題点を探そうとしてしまいます。自分が悪いとはわかっていますが、「あなただって・・・」とやったことはありますか。それは認めたら負けだからです。でも私たちは誰とも競争しているわけではないのに「ライバルは？」と言われると浮かんでくるのです。本来私たちの目標はもっと大きなものですが、「あの人以上は・・・」と目標をまちがえてしまっているのです。こういうものに惑わされていると、黄金律にしたがって歩むことはできません。植物だってお互い遮らないように黄金比にのっとって育っています。しかし人は「あの人以上に立ちたい」のですから、その人のことを踏み潰して生きているのです。この生き方はこの世の法則に従っていません。私たちの生活は自分の生き方に対して自らが理解し、自分がどうすべきかを知ったときに、見方が「相対的」なものではなく、「自らが進みたい道に進むためにどう歩むべきか」がわかるようになるのです。その生き方をあなたはできていますか。イエス様はその生き方を十字架の上で伝えました。私たちはその十字架の底辺にいて、下にいるものが上にいる神の存在を知ることができたときに、横の関係が確立されるのです。相対的に生きている人は絶えず人を見ているので、よい意味でも悪い意味でもその人を超えることはできません。私たちは毎週、学び、聞き、成長していますが、自分の変化には気が付かないし、環境の変化が嫌いです。隣の人が、環境が変わって苦勞するのを知っています。しかし十字架の底辺にいた私たちが十字架の上のイエス様を仰ぎ見ようとしたときに、自分がどのように変わっていったかわかるのです。そして変わっていった姿を見ると隣の人を初めてその姿でみることができるのです。自分の問題を見ることができなければ人の問題を見たときに裁きだけです。しかし自分の問題を見て人の問題を見ればその人を赦すことができるようになるのです。あなたがあなたの問題を赦され自分が解決されたことを知ったら、あなたの隣の人の問題を受け入れ赦すことができるようになるのです。①自分に対する愛の回復。私たちはいつから自分を愛せなくなったのでしょうか。ある人から「お前って・・・」と自分を否定されたときから私たちは自分を愛せなくなっていきます。否定的な言葉や態度、本当は見たくなかった態度、本来自分はそういうつもりでやっていなかったのに否定されてしまった言葉、それらが私たちの心を踏みにじったのです。その時から自分を愛せなくなり、同時にそれを言った人たちに対して「自分だってそうじゃない」と思っていた時が必ずあるのです。それを幼い時なので覚えていないだけです。（インナーチャールド）だから全ての物事の判断は、人を見てするのです。しかしイエス様はあなたのことを受け入れるために、またあなたの重荷を下ろし、本来あなたが創造された元のすばらしい姿に戻るために、そしてあなたが一人で傷ついた生き方を改めるために十字架に進んだのです。その方があなたを愛していると言っているのです。自分が愛されたということ、あなたがすばらしいものなのだとすることを知らなくてはいけません。今あなたは、たくさんの人に色々な色を塗りたくられて混沌としてしまっていますが、その絵の具を落として、自分のテーマの色を見つければよいのです。「あなたは何のために生きるのか」を見つめることがあなたの色を見つめることです。それができれば、あなたはあなたのことを愛することができるようになります。この世の中の人が生きてきて、あなたに語ったことや、あなたが見てきて「こうすまい」と思ったことが必ず正しいとは限りません。私たちは「ネガティブ」なことを通して「よいこと」をするではありません。よいことをするために、「よいもの」を通して「よいこと」をするのです。だから私たちは自分への愛の回復をしなくてはいけません。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ5：3）この貧しさは「心の汚さ」のことです。この貧しさを知ったときが肝心です。「自分はだめなんだ」と考える人もいますが、その弱さを「どうやったら回復できるか」とやる人もいます。スポーツ選手の強い人は自分の弱さを知っていて、その弱さを克服するために毎日特訓しています。あなたはどうでしょうか。自分の弱さに気付いて自分の渴きを追い求める人は幸いです。神様のすばらしさはあなたのものだと言われています。いつまでも「自分はだめだ」とさばっていると、あなたもあなたの周りもだめになってしまいます。もう自分をさばらないでください。そしてあなたの罪を背負ってあなたの代わりに十字架に架かった人がいるのです。その人に自分に塗りたくられたものをゆだねる決心をすれば、あなたのすばらしさに気付くことができます。心のガラスが曇ってはいはあなたのよいものも真っ直ぐに外にはでないし、入ってくるものも曲がって入ってしまいます。くもりをとるために神様の愛を知ってください。「今日こそ変わらなければ」という思いで聴けばあなたの心に響くはず。②隣人に対する愛の回復！自分を愛することが出来ない人は隣人を愛することはできません。だから自分を愛することが大事です。愛するためには赦されたということを知らなくてはいけません。あなたは隣人をどのように愛していますか。愛し方はただ1つです。自分にしてもらいたいことを相手にもするだけです。しかし私たちは愛するものにとにかく、自分がしてもらいたくないことをしてその人の愛を確かめようとしてしまいます。「愛する」ではなくて「愛されよう」としてしまうのです。だから確かめるのです。お互いにそうしていると答えが得られず「断絶」してしまうのです。ここから愛からストレスになるのです。愛する人に対する裏切りは憎しみなのです。関係が深いほど憎しみも深くなってしまいます。しかし本来愛は与えるものです。与え合っていればあふれるのです。そのために自分を愛することが大切です。自分を愛せないでいると、相手がなぜ自分を愛せるかわからないのです。厳しいことを言う、それは愛している証拠です。自分に真剣に向き合ってくれることはうれしいことのはずです。③神様との愛の回復。何かあれば神様に祈る心を私たちは小さいときから持っています。しかしその愛がわからなくなっています。「神様は見ているよ」。・・・幼い頃からそういわれ神様はあなたにとって罰を与える人になってしまっているのです。しかし神様はそんな人ではありません。あなたを愛していて、あなたが誤っているなら「こっちだよ」と一緒に手をとってくれるのが神様です。あなたはこの関係を持っているのでしょうか。愛されて初めて人は愛することができるのです。この関係をもう一度回復することができれば、あなたの環境は変えられるはず。あなたがどんなに苦しくても、あなたの周りが何と言おうとも、あなたを形作った人の愛がわかれば、愛に立ち返ることができるのです。あなたの本当の姿に戻ることに愛なのです。心に塗りたくられたものをもって「愛」を回復しましょう。（要約者：岩崎 祥誉）